



2020年度

洗足学園音楽大学 大学院音楽研究科

大学院グランプリ 特別演奏会



全8部門の首席・優秀奏者より
部門を越えた最優秀賞を決定!

2021年2月14日(日)

15:00開演 [14:30開場]

洗足学園 前田ホール



洗足学園音楽大学

ごあいさつ

本日は、洗足学園音楽大学大学院音楽研究科「大学院グランプリ特別演奏会」にご来場いただき、誠に有難うございます。

この演奏会は、学位審査としての修了演奏会において選出された各コースの首席奏者・優秀奏者によって最高峰のグランプリを決定する、まさに特別な演奏会となっております。

今年度はピアノ、木管楽器、弦楽器、打楽器、電子オルガン、和楽器、声楽、ギターの8部門により行われます。

大学院生は、それぞれの専門領域を幅広い視野から研究し、音楽の理論および応用を教授研究、自己の音楽を表現すべく日々錬磨してまいりました。

コースを超えての審査の難しさはありますが、音楽と真摯に向き合い、自分の想いを音で伝え表現することは、どの専攻においても違いはありません。

また、他分野の先生方にもご審査頂き、審査結果が公表されることは、自身の音楽を伝える力を改めて見直す良い機会ともなり、修了後の演奏活動における道標の一つとなることと確信しております。

そして本学大学院音楽研究科での研鑽の日々により、国際的視野に立ち、実行力をもった次代を担う人材として、この前田ホールから世界の檜舞台へと羽ばたき、活躍されるよう願っております。

皆様には今後とも温かくお見守り頂きたく、また、この演奏会の特質をご理解頂き、お楽しみ頂けましたら幸いです。

洗足学園音楽大学・大学院
大学院音楽研究科長
教授 小嶋 貴文

1. 弦楽器部門

山口 亜純 (ヴァイオリン)

Pf. 田中麻紀

J.シベリウス / ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47

Jean Sibelius (1865-1957) // Violin Concerto D minor op.47

第1楽章 Allegro moderato

第2楽章 Adagio di molto

第3楽章 Allegro ma non troppo

各楽章抜粋

【解説】

《ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47》は、1903年から1904年、シベリウスが38歳の頃の作品である。若い頃にヴァイオリニストを志した程にヴァイオリンという楽器を知り尽くした彼が唯一残した協奏曲作品である。

この曲には、初稿版と改訂稿(現行版)がある。初稿版を印刷する前の小さな修正が細部に留まらず変更が構造の基礎に触れたため、全体を大幅に書き換え、現行版へと改訂することとなったのである。その要因としては、彼自身しか知り得ない内面的な理由があったものの、外的原因もいくつかあったといえる。1904年2月8日ヘルシンキでシベリウスの指揮、オトカル・ノヴァチェク(1866-1900)のヴァイオリン独奏で行われた初演では、全体を通して極めて演奏技術が難解であることから、演奏に関して聴き手に厳しいものがあったという。また、この協奏曲に関して、この頃フィンランドの第一人者であった批評家のカール・フロディンは特に手厳しく批判的な主張をした。シベリウス自身が実際の 現状よりもこのことを重く捉えていたことも関係しているだろう。初稿版から2年の月日を置いて1905年に完成した改訂版では、いくつかの超絶技巧的要素や音楽的モチーフを削除したものの、オーケストレーションにも変更を加え、より重厚なサウンドを作り上げている。幻想的な独創性と強く野生的な魅力の中に緻密さが際立つ、ヴァイオリンの魅力を最大限に引き出した間違いのない傑作である。

今日では初稿版と現行版が一緒に収録された録音も発売されており、聴くことができる。また違ったシベリウスの音楽的モチーフや熱量を聴くことができ、大変興味深く、面白い。

【プロフィール】

長野県出身。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻を首席で卒業。学内コンサート『コンチェルトの夕べ』に大学、大学院共にソリストに選ばれ出演。第89回読売新人演奏会に出演。これまでにヴァイオリンを水野佐知香、栗原尚子、鈴木由美、ヴィオラを大野かおる、室内楽を水野佐知香、羽川真介、安藤裕子、川原千真の各氏に師事。2016年より安永徹、市野あゆみ両氏による特別講座を受講。また、オレグ・クリサ、ナムユン・キム、フェデリーコ・アゴスティーニ各氏来日時に師事すると共に、学内の数々のマスタークラスのレッスン講座を受講。在学中に、前田記念奨学生に認定。



2. 声楽部門

原 芽衣 (ソプラノ)

Pf. 牧 華子

中田 喜直 (1923-2000) / 歌曲集《マチネ・ポエティックによる四つの歌曲》より

第2曲 さくら横ちょう

小林 秀雄 (1902-83) / すてきな春に

G.ヴェルディ / 歌劇《ファルスタッフ》より

Giuseppe Verdi // Falstaff

そよ風にのって妖精たちが Sul fil dun soffio etesio

G.ヴェルディ / 歌劇《リゴレット》より

Giuseppe Verdi // Rigoletto

慕わしい人の名は Caro nome

【解説】

〈さくら横ちょう〉「マチネ・ポエティックによる四つの歌曲」の二曲目。五・七調のソネット式で「と」「う」で韻を踏ませている。満開の桜の中での過ぎ去った恋を歌っている。

〈すてきな春に〉春とともにおとずれた恋の思いと、愛することの喜びを高らかに歌い上げている。

《ファルスタッフ》3幕。ファルスタッフが獵師姿で現れ、真夜中の12時の鐘になる。アリーチェも登場し逢引を始めますが、すぐにメグが「助けて、悪魔がくる！」と割って入ってくる。妖精の女王に変装したナンネッタが「Sul fil d'un soffio etesio」と歌う。

《リゴレット》1幕。生まれて初めて恋をしたジルダが「グアルティエマルデ…」と名前を呼びそのときめきをと歌う。

【プロフィール】

東京都葛飾区出身。洗足学園音楽大学声楽コース卒業。洗足学園音楽大学大学院2年在学。これまで、《魔笛》童子I、パパゲーナ、夜の女王役。《ヘンゼルとグレーテル》グレーテルで出演。声楽を宮部小牧、砂田恵美、鶴木絵里の各氏に師事。



3. 電子オルガン部門

CHEN YUJIN (電子オルガン)

J.ブラームス / 交響曲 第1番 ハ短調 作品68より

Johannes Brahms (1833-97) // Symphony No.1 in C minor op.68

第1楽章 Un poco sostenuto-Allegro

【解説】

《交響曲第1番 ハ短調》op.68 はブラームスが20代の時に書き始めた作品であり、第一楽章は堂々とした序奏で始まる。ティンパニの上に弦楽器が半音ずつ上昇していくような悲壮感漂うメロディーを演奏し、管楽器は反対に下降形のメロディーを演奏する。この部分が終わると穏やかな気分となり、その後はソナタ形式で書かれたAllegroの部分に入っていく。展開部冒頭は第一主題が巧みに活用され、一旦静かになった後に序奏部のような気分で音が盛り上がり、ティンパニが激しく連打するクライマックスを築いた後に再現部に入る。最後は第1主題のメロディーがハ長調で演奏される。

【プロフィール】

中国出身。中国西安音楽大学園卒業。2016年7月来日後、2018エレクトーンフェスティバルアンサンブルコンテスト銀賞を受賞。電子オルガンを譚 艺民、大木 裕一郎、高田 和泉、加曾利 康之の各氏に師事。



4. 打楽器部門

角田 和渉 (マルチパーカッション)

PI. 小松 幹 PI. 加賀美 諄

PI. 伊藤 陽介 PI. 細野 幸一

EO. 大熊 美子 EO. 内海 菜々美

石井 眞木 / アフロ・コンチェルトーヴァージョンB 作品50B

Maki Ishii // Afro Concerto – Version B op.50B

【解説】

本日は石井眞木の作品を演奏するが、石井自身が曲について述べた文章を引用し、曲目解説とする。

Afro concertoこの協奏曲は、題名にもあるように、アフリカの土俗音楽の魅力—執拗な反復がまきおこす呪術的な音楽の世界に魅せられ、そこから大きな触発をうけて作曲された。具体的にも打楽器独奏者は、数種の皮質の<アフリカン・ドラム>や、マリンバのルーツともいわれる単純な音階をもつ当地の鍵盤打楽器<バラフォン>なども駆使して、独特な音響時空間を現出させる。そして、この作品の核になる音響構造にも、アフリカのセヌフォやピグミーの音楽のいくつかの断片が用いられており、それが独奏者とオーケストラによって、音色、音形をさまざまに変えながら<執拗に反復>されて曲は進行していく。このように、この協奏曲では<アフリカ>が曲の内容と緊密なかかわりをもっているのである。

【プロフィール】

群馬県出身。12歳から打楽器を始める。洗足学園音楽大学打楽器コース卒業。今までに打楽器を高田亮、森茂、山澤洋之の各氏に師事。和太鼓を林英哲氏に師事。音楽の和洋を問わず日々研鑽している。宮崎県宮崎新聞社主催宮日コンクールにて優秀賞を受賞。



5. クラシックギター部門

大貫 淳也（クラシックギター）

M. ポンセ / ソナタ・ロマンティカ [シューベルトを讃えて] より

Manuel María Ponce (1882-1948) // Sonata romántica [Hommage a Fr.Schubert qui aimait la guitare]

第1楽章 Allegro moderato

第3楽章 Allegro vivo

第4楽章 Allegro non troppo e serio

【解説】

M.ポンセはメキシコの作曲家・音楽教師・ピアニストである。

1929年発表のソナタ・ロマンティカは、フランツ・シューベルトに捧げられた作品で、その作風を偲ぶかのようにロマンティックな流儀を用いて作曲されている。

・第1楽章 アレグロ・モデラート イ長調 4分の4拍子

古典的なソナタ形式をとるが、たつぷりと歌う主題が十分に展開され甘美な趣を醸し出す。第2主題の3連符の連なりや、付点音符の多用にシューベルトらしさをよく研究したことが伺える。展開部は主に第2主題が使われていて、やがて第1主題のデフォルメされたものが、自然と再現部を導く構成となっている。

・第3楽章 アレグレット・ヴィーヴォ ホ短調 2分の2拍子

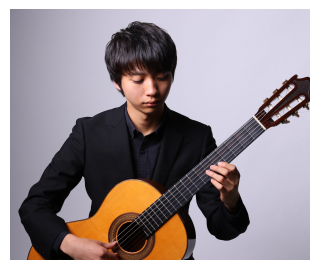
シューベルトの「即興曲」あるいは「楽興の時」をまねたような、軽妙さの中に哀愁が伺える間奏曲である。3部形式で中間部はホ長調となり抒情的である。

・第4楽章 アレグロ・ノン・トロppo・エ・セリオーソ イ短調 4分の4拍子

明確な主題を2つ持つが、ソナタ形式にはこだわらず、調性の流れも自由に組み立てられている。ギターの性格を生かしたアルペジオがめざましく、また結び近くの全ての弦を用いた和音の連なりは印象的であり、堂々としたクライマックスを形作る。

【プロフィール】

埼玉県出身。埼玉県立川越高校、首都大学東京 航空宇宙システム工学コースを卒業。高校、大学にてギター合奏を行い、18歳より独奏を始める。これまでに、小林徹、原善伸、鈴木大介、大萩康司の各氏に師事。



6. ピアノ部門

石津 若葉 (ピアノ)

C.ドビュッシー / 《映像》第2集より

Claude Debussy (1862-1918) // Images 2ème série

第3曲 金色の魚 Poissons d'or

F.ショパン / ピアノ・ソナタ 第2番 変ロ短調 作品35

Frédéric Chopin (1810-49) // Sonata for Piano No.2 in B flat minor op.35

第1楽章 Grave - Doppio movimento

第2楽章 Scherzo

第4楽章 Finale / Presto

【解説】

《映像》第2集の3曲は1907年に作曲された。ドビュッシーは、1903年に作曲した《版画》で印象主義的なピアノ書法を確立したが、事物や情景をありのままに表現しようとするこの書法は、この作品でさらに強調されている。第3曲〈金色の魚〉は、中国か日本の漆塗りの盆に描かれた金魚からインスピレーションを得て作曲されたといわれる。金魚が飛び跳ねるような急速な動きが生き生きと流れている。

《ピアノ・ソナタ第2番》は、第3楽章の葬送行進曲のみ1837年に作曲され、その他の楽章は1839年に作曲された。ショパンの後期の作品、例えば《ピアノ・ソナタ第3番》は明るく華々しく曲を終えるが、この作品は第1楽章から第4楽章にかけて長調の割合や熱量、音量が減衰していき、全体的に暗い色調に支配されている。これは葬送行進曲を出発点として構想を練ったことが関係しているであろう。

第1楽章の冒頭は「死の動機」と呼ばれる減7度の跳躍で始まる。落ち着きがなく不安に駆られたように動く第1主題、コラールのような第2主題を経て、長調で力強く終止する。第2楽章は「死の舞踏」を連想させるような不気味な雰囲気醸し出している。第4楽章は終始両手のユニゾンとなっており、まるで墓場に吹く風のようなものである。最後はffで悲劇的に幕を閉じる。

【プロフィール】

神奈川県出身。3歳よりヤマハ音楽教室に通い、6歳よりピアノを始める。2010年までヤマハマスタークラスピアノ演奏研究コースに在籍。鎌倉女学院高等学校を卒業。洗足学園音楽大学ピアノコース（ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンス・クラス）を首席で卒業、併せて成績最優秀賞を受賞。第35回かながわ音楽コンクールピアノ部門特選。第3回 Shigeru Kawai国際ピアノコンクールセミファイナリスト。2017、2018年度、公益財団法人明治安田クオリティオブライフ文化財団より音楽学生奨学金を授与。これまでに江口文子、佐藤俊、後藤康孝、渚智佳、江崎光世、江崎昌子の各氏に師事。現在、ピアノを浦壁信二氏に師事。和声学、対位法を平井京子氏に師事。



7. 和楽器部門

WU SHNAGMEIYUE (箏)

尺八 青木 鈴慕

宮城 道雄 (1894-1956) / 春の海

吉崎 克彦 (b.1954) / 風にきけ Part II

【解説】

《春の海》は宮城道雄が1929年に作曲した箏と尺八による二重奏曲。春の海の様子がかもめの鳴き声などを描写していて、おだやかな春の日ざしをあびた静かな海の風景が、目の前に浮かんでくるようだ。宮城が瀬戸内海を旅行したおりに、春には美しい桃の花が咲乱れるという島の人々の会話を耳にし、こうした情景を思いうかべて、この曲をつくったともいわれている。新しい邦楽を代表する楽曲である。

吉崎克彦の《風に聞け Part II》は風が起こす心のさざ波を描いた箏独奏の為の無言歌である。風の強さや弱さを借りて、人の気持ちの起伏を表現する。悩みや喜びは風によって生じ、風によって落ちる。

【プロフィール】

中国陝西省出身。3歳より中国民族舞踊、5歳よりピアノ、8歳より中国箏をそれぞれ習い始める。漢台高等学校音楽科を経て、西安工程大学国際経済貿易学科卒業。2015年度、中国大学生芸術コンクール銀賞。2016年7月来日、2017年から生け花と伝統文化を、2018年から日本箏を習い始める。吉原佐知子、野澤佐保子、市川香里、鳥越菜々子、李明姫、劉墨涵の各氏に師事。



8. 木管楽器部門

前原 希美（フルート） Pf. 井上 友美

L.ライタ / 演奏会用ソナタ 作品64

László Lajtha (1892-1963) // Sonate en concert op.64

第1楽章 Entrée avec deux cadences (2つのカデンツァを伴った導入)

第2楽章 Berceuse nostalgique (ノスタルジックな子守唄)

第3楽章 Menuet mélancolique (メランコリックなメヌエット)

第4楽章 Final gai (陽気な楽章)

第1、2、4楽章は抜粋して演奏

【解説】

L.ライタ(1892-1963)はハンガリーの作曲家、民族音楽学者、指揮者。ブタペストで生まれ、同地でピアノと作曲を学び、ハンガリー民族博物館で民俗音楽の研究の仕事をした。この時期には、バルトークやコダーイと共同作業をしていた。また1910年から1914年にかけて、半年ずつをパリで過ごし、ドビュッシー、ラヴェル、ストラヴィンスキーが華々しい活躍をしていた時代を身をもって経験した。1919年からブダペスト音楽院で作曲、室内楽さらに美学とハンガリー民謡理論を教えるようになった。

《演奏会用ソナタ》は1958年の作品で晩年の作品である。「2つのカデンツァを伴った導入」「ノスタルジックな子守唄」「メランコリックメヌエット」「陽気な楽章」の4楽章からなっているが、第1楽章を民族語法が聴かれる。

【プロフィール】

神奈川県出身。15歳よりフルートを始める。洗足学園音楽大学管楽器コースを卒業。第34回かながわ音楽コンクール フルード部門一般の部入選。ユルゲン・フランツ、マルク・グローウェルス、フィリップ・ベルノルド、各氏のマスタークラスを受講。フルートを酒井秀明、菅井春恵、岩崎紗佳の各氏に師事。室内楽を石田多紀乃、星野均、山根公男の各氏に師事。





洗足学園音楽大学

ひと、音楽、未来、世界をつなぐ。

洗足学園音楽大学は、音楽の学びと実践を通じて、
豊かな社会づくりに貢献します。